

フランス同性婚とインセストに関する人類学的試論

國 弘 暁 子

I. はじめに

オランダで2001年に同性婚が認められて以来、欧米や中南米、オセアニア地域において同性婚の合法化が進み、文化人類学の入門テキストにおいても、同性婚の事例は現代社会の新しい婚姻のかたちとして取り上げることが不可欠となっている。21世紀を生きる人向けに編纂された社会文化人類学のテキストでは、以下に示すように、婚姻に関する章は、現代の同性婚の話題から始まる。

今日多くの国では、婚姻についての法的定義が書き換えられ、同性カップルの結婚を認めるようになっている。しかし多くの場合、国を二分するような激しい対立を生み出している。結婚の定義を変えることに動揺する保守派のグループは、婚姻とは男女が結ばれることのみを意味すると主張し、それに対して、結婚を異性愛のカップルだけに限定するのは差別的であると、改革派は応戦する。フランスでは、2013年に合法化されるまで、数ヶ月間に渡って、賛成・反対、両サイドの大規模デモが行われた。法改正に賛成したのは140万人であったが、法改正に反対する人々をうまく扇動する存在としてローマ・カトリック教会が浮上し、注目的になった [Balzani & Besnier 2021: 58]。

上述にあるように、フランスのローマ・カトリック教会関係者が同性婚法に対して反対表明を行ったことは事実であり、当時リヨン教区の司教であったフィリップ・バーバリンも自ら反対派のデモに参加している⁽¹⁾。反対派は教会関係者に限られていたわけではなく、そこに一部の政治家も加わり、同性婚を認める法律に断固反対する姿勢を示したと言われている [テリー 2019: 12]。反対派は総動員をかけたものの、最終的には「同性当事者カップルに婚姻を開放する法律 *La loi ouvrant le mariage aux couples de personnes de même sexe*」 [長谷川 2015: 64]、通称

(1) https://www.lemonde.fr/societe/article/2012/11/16/monseigneur-barbarin-participera-a-la-manifestation-anti-mariage-gay-a-lyon_1791804_3224.html, 最終閲覧日2024年9月14日

「みんなのための結婚 *marriage pour tous*」が2013年に成立、フランスは世界で13番目に同性婚を合法化させた。ただし、ローマ・カトリック教会は未だに同性カップルの結婚を祝福することを認めていない。

同性婚法の成立から既に十年の月日が経過しており、当時フランス国内を二分するような激しい議論に関する研究論文も複数発表されている。その論者の一人、フランスの法社会学者イレヌ・テリーは、当時の反対派が同性婚法の唯一の目的は「性の無差別化を強いること」だと主張していた点に注目する。「性の無差別化」つまり、男性・女性の区別を無くすことが「人類の遺産を断ち切る」ことを意味し、それが、「人類学的断絶」を導くのだと執拗にくり返したという[テリー 2019: 12]。「人類学的断絶」について、テリーは解説を加えていないが、フランスのメディア記事では、古くからの慣習が別の慣習に取って代わる現象を指して使われている⁽²⁾。つまり、反対派の主張にある「人類学的断絶」とは、慣習として男女の結びつきを結婚としてきたものが、突如、性別を問わないことになると、それは人類史上劇的な変化になるということの意味していたのだろう。

それにしても、なぜ結婚においてカップルの性別を問わないことが「人類学的断絶」をもたらすと考えられたのか。フランスでは1999年の段階ですでに、同棲する同性カップルに対して結婚に準じた諸権利を保証するボックスが施行されている。それに乗じて結婚のステイタスを与えることに、どれだけ重大な差異が生じると恐れられたのだろうか。この点を明らかにするために、本稿の第二章では、フランス社会における民事婚スタート期から、ボックス、そして同性婚の合法化までの変遷をたどり、同性婚がインセストに類するとされていた事実を明らかにする。第三章では、「人類の遺産」として同性婚反対派が死守しようとした男女の結婚にどのような意義があるのかについて、聖書の読解、および教義の実践から読み取ることを試みる。

聖書の読解方法については、ローマ・カトリック修道会「仔羊共同体」リヨン支部の七人のシスターと三人のブラザーに教授していただいた。2022年9月末から約6ヶ月間、リヨン高等師範学校の訪問研究員としてリヨン市内に滞在しており、その間、「仔羊共同体」リヨン支部に毎週通っていた⁽³⁾。リヨン支部のシスターとブラザーから聖書についての教えを受ける上で、筆者自身がローマ・カトリック教会で洗礼を受けていないこと、また教会に通った経験もないことを、

(2) フランス新聞「ル・モンド *Le Monde*」のウェブサイト記事(2013年11月1日)では、フランス国内で比較的短い期間に土葬から火葬傾向に傾いている現象のことを「人類学的断絶」と表現している。https://www.lemonde.fr/societe/article/2013/11/01/la-cremation-une-rupture-anthropologique-majeure_3506853_3224.html

(3) 1981年にフランスで設立された比較的新しい修道会の「仔羊共同体」は、フランス以外にも、イタリア、スペイン、ポーランド、アルジェリア、オーストリア、チリ、スペイン、アメリカ合衆国の8カ国に活動範囲を広げている。共同体に所属する160人のシスターと30人のブラザーたちは、8カ国に分散して活動しているが、年に一度、7月から8月にかけての約2ヶ月間、フランス南部の村に皆集結して共同生活を営んでいる。そして9月には新しい新天地が与えられて、再び分散する。

初回の面談時に伝えている。

修道会「仔羊共同体」のリヨン支部では、毎週木曜日の夜8時15分から、福音を繰り返し唱え、その意味を共同で考えるための勉強会（École de la Parole）を行っている。勉強会では日曜日のミサで神父が読み上げる福音の一節を皆で音読することになっており、事前に予習をしてから参加することが可能であった。勉強会での使用言語はフランス語だが、英語を得意とする二人のシスターが、随時、外国人のために懇切丁寧に説明してくれた。10月6日木曜日から2023年3月日本に帰国するまでの間、筆者は一度も欠かすことなく福音の勉強会に出席し、さらに、個別に面談を依頼して聖書の記述で理解できないことなどについて質問していた。

II. 同性カップルと同性婚について

フランスの同性婚法は2013年に成立するが、それよりも14年前の1999年、異性、あるいは同性の同棲カップルに対する結婚に準じた諸権利を保証する法律「パックス PaCS（連帯民事契約）と同性に関する11月15日法律」が成立している。それは法におけるカップルの定義が刷新される大変革であったと、法社会学者のテリーは主張する [テリー 2019: 24]。カップルの定義がどのように刷新されたかについて、テリーはフランス革命時に成立した民事婚の歴史とともに解説している。民事婚、あるいは市民婚（mariage civil）とは、市役所の挙式で成立する婚姻のことであり、教会での挙式を意味する宗教婚（mariage religieux）とは区別される。

民事婚の成立は、フランス革命時の新勢力が、婚姻を司る権限を教会から奪取したことに由来する [長谷川 2015: 64]。1791年に創設された当初は、父の権利と義務を確立させるための制度であったと、テリーは指摘する。既婚の女性が子供を産むと、その女性が結婚する男性が父となり、そこに父権を生じさせた。子どもを産む女性は選挙権を有しておらず、夫の許可なしには何も実現できない未成年であり、よって、既婚の男性が、夫そして父として家族全体を代表していた [テリー 2019: 93, 101]。よって民事婚における二者の関係は、妻が夫に服従する存在となるもので、テリーの表現に従えば、二人が一つとしてカウントされていたのだった [テリー 2019: 103]。

二人の人間が一つに数えられていた時代から、やがて一プラス一が二になるものとして、婚姻カップルが再定義される。それは、民事婚の契約的性格がのちに、離婚の可能性を導いたことに由来すると、テリーは主張する [テリー 2019: 104]。離婚の成立条件には、まず、二人の人間が対等に存在すること、つまり、一方が他方に従属していない関係が前提となる。この新しい関係のあり方を「二重奏（デュオ）」とテリーは名付けており [テリー 2019: 103]、そして、この二重奏カップルのあり方が、対等な二人の人間の同棲関係を法的に認める「パックス PaCS」も可能にしたことになる。対等な二人であれば、異性が同性かは問われない、というわけである。

パックスをめぐる議論がフランス国内で交わされていた頃、当然ながら反対の意見もあり、フ

ランス国外の研究者をも巻き込むかたちで展開された。反対派の一人、哲学者のシルビアンヌ・アガサンスキー (Sylviane Agacinski) は、パックスについての議論の中で、アメリカでのジェンダーやクィアに関する議論がフランスに持ち込まれば恐るべき事態になると主張し、さらに恐るべき存在の代表格としてアメリカの哲学者ジュディス・バトラーの名前を挙げた [Butler 2002: 24-25]。パックスを認めるのは危険なアメリカナイゼーションだとする考えが示されたわけだが、名指しで批判されたバトラー自身はこの事実を重く受け止めて、フランスにおける結婚と親族の議論に関する論考を発表する。

バトラーはまず、アガサンスキーをはじめとする構造主義者の文化概念に注目する。その文化とは、子供は男女の間に生まれること、そして子供の身元は父と母によって保証されるという考え方を生み出すもので、パックスに懐疑的な人々の多くがこの文化観を持っていたという。つまり、男女の結婚が正当であるとする見方が揺らぐと、文化なるものの威信や権威も揺らぐのではと不安の声が出されたと言うのである [Butler 2002: 29]。この文化概念とはレヴィ＝ストロースから引き継がれたもので、女性の交換とインセストの回避によって成り立っている。身近な女性を交換することによってインセストを回避する慣習は、人類に共通して存在するとレヴィ＝ストロースは主張したが、バトラーにとって、女性の交換とは異性愛を擁護するものに他ならない [Butler 2002: 32]。レヴィ＝ストロース以降も交換論がフランスで再起する理由について、バトラーはヨーロッパの特殊な事情によるものだという。ヨーロッパでは国境が移民に開かれており、女性が外からやってくることで「クラン」としてのフランスの文化アイデンティティが形成される。つまり、女性の交換から生み出される単系出自集団は一つの文化を共有し、その文化が国民国家アイデンティティの形成に有効なのだと、バトラーは主張する [Butler 2002: 32-33]。

それに対して、人類学者のトーマス・ストロング (Thomas Strong) は異なる見解を提示する。ストロングはまず、バトラーによるレヴィ＝ストロースの読み方のずれを指摘して、構造主義的な女性の交換とは、単系出自集団のアイデンティティではなく、単系出自集団を超えた他者と関係を構築するものだと強調する [Strong 2002: 413]。そして、パックス反対派の危機感はいデンティティ喪失ではなく、インセスト・タブーを犯すことにあったと主張する。同性の結びつきは同族・同属の結びつき、つまりインセストの変形だと見なされ、インセスト同様に嫌悪感を持たれ、パックスは危険視されたのだという [Strong 2002: 409-410]。レヴィ＝ストロースの後継者の一人、フランソワ・エリティエ (Françoise Héritier) は当時パックスに反対しており、同性間の結びつきをインセストの変形と見做していたことは、エリティエ自身の著作から明らかである [Gaillard 2022: 94-95; Strong 2002: 411]。

ただしエリティエは、パックスには反対していたが、同性婚の合法化への気運が高まるなかで、同性関係に対する自身の考えを一変させており、「人類学者にとって、社会の変革は歓迎すべき出来事だ」と述べている [Gaillard 2022: 149]。同性婚に関する有識者会議 (2012年) に招かれ

た際には、エリティエはまず人類学は同性婚に反対するものでないと明言した上で、同性婚を合法化する際に留意すべきは代理出産等の生殖医療の加速であると述べていた⁽⁴⁾。つまり、2012年の時点でエリティエが問題視していたのは、インセストの問題なのではなく、同性カップルが子供を持つことにあったことがわかる。2013年の同性婚法制化とともに、フランスでは同性カップルの養子縁組も可能となったが、エリティエの危惧を反映したかのように、生殖補助医療の利用は認められなかった。

以上まとめると、フランスでは民事婚の成立以降、カップルの定義が徐々に変化を遂げて、序列関係にあった男女が自立した平等な二人となり、そして、平等な二人の性別を問わない結婚が合法化されるに至った。その一方で、民事婚と袂を分かった宗教婚ではカップルの定義は変更されることなく、今日においても男女が一体となることを要請している。つまり、カップル二人の性を異にするか、それとも同じであることも認めるのか、この点が今日では宗教婚と民事婚の大きな溝となっている。同性婚論争の過程では「人類学的断絶」というレトリックも飛び出したが、実のところ、同性の結びつきがインセストの類に含まれるのかどうかについては、明白な議論はなされていない。次章では、同性婚はインセストとなり得るのかについて、聖書を参照しながら考えてみたい。

Ⅲ. 聖なる結婚とインセスト

同性婚をめぐるフランス国内を二分するような激しい対立が起きていた頃、冒頭でも言及した元リヨン教区大司教フィリップ・バーバリンは、同性婚を認めればポリガミイ polygamy やインセストも認めることになるだろうと、同性婚に反対する理由を述べていた⁽⁵⁾。同性婚法はその後成立したが、フランス国内でポリガミイを認めることにはならず、インセスト・タブーのタカが外れることもなかった。しかし、十年以上の月日が経過した今も、フランスのローマ・カトリック教会では同性婚の祝福を認めていない。ローマ・カトリック教会では同性婚をどのように解釈しているのかと疑問に思い、リヨン大聖堂の司祭に直接尋ねてみたことがある。それはちょうど、ローマ教皇フランシスが、「ホモセクシュアルであることは悪ではないが、しかし、それはやはり罪であると思う」と述べたことがメディアで騒がれていた時のことだった⁽⁶⁾。以下は、大聖堂敷地内にある司祭のオフィスを、2023年1月28日に訪問した際の聞き取り内容である。

(4) <https://www.dailymotion.com/video/xvxd5> 最終閲覧日2022年10月5日

(5) https://www.lemonde.fr/societe/article/2012/09/14/le-mariage-homosexuel-ouvrira-la-voie-a-la-polygamie-et-a-linceste-selon-le-cardinal-barbarin_1760632_3224.html, 最終閲覧日2024年9月14日

(6) https://www.lemonde.fr/en/international/article/2023/01/25/pope-francis-says-homosexuality-is-not-a-crime-but-it-s-a-sin_6013009_4.html#:~:text=On%20Tuesday%2C%20Francis%20said%20there,Yes%2C%20but%20it's%20a%20sin 最終閲覧日2023年1月25日

私たちは、同性愛であること、そして、同性愛的な行いを、分けて考えなければならない。異性の人を愛さないこと、同性の人を愛すること、それは私たちの自由であり、Dieu（神）に関わる問題とはならない。Dieuは常に私たちの心を見ている。気をつけなければならないのは、同性パートナーと共に養子を迎えるなどにより、周囲にとって不都合な状況をもたらすことがあってはならない。フランスの同性婚だが、カトリックの結婚と同じものではない。聖書では、結婚とは男女の結びつきであると教えている。

この時の発言では、教会での結婚（宗教婚）と同性婚（民事婚）との違いが強調されている。フランスのローマ・カトリック教会では同性間の婚姻を祝福していないため、同性婚を含んだ民事婚とは明確に異なるとする主張は当然のことだろう。一方で、同性カップルの養取問題については、子をもつ二人の性別がなぜ重要な意味を持つのか、結婚によって結ばれるのは何故に男女に限定されるのかについては、疑問が残った。

司祭の教えに倣って、聖書の中ではどのように男女の結びつきが規定されているかを明らかにするために、まず創世記を参照してみた。創世記の第2章21節以降には、男女の結びつきについて次のように記されている。

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れてこられると、人は言った。

「ついに、これこそわたしの骨の骨

わたしの肉の肉。

これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう

まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

このように、一人の体から、もう一つの体がつくられ、その二体が結ばれたとある。最初の人間は両性具有とも解釈されるようだが（Michaud 2020: 475）、もとは一つであった体が二つに分けられ、オリジナルとその分身とが、それぞれ男と女と命名されたという。この時点での男女とは元来一つであったのだから同じサブスタンスを共有していることになる。それらが再び一体となるのはインセスト（近親相姦）にも相当する。しかし、アダムとエバの関係について、聖書の中ではインセストとして糾弾されることはない。

神話の構造分析を行うエドモンド・リーチは、アダムとエバの結びつきを近親相姦の罪と指摘しながらも、それは神の尋問と呪によって他者間の生殖行為に置き換えられたと解釈する。アダ

ムはエバを「妹」ではなく、「妻」として娶り、「産めよ、ふえよ」との命に従ったのだと。さらに、アダムとエバのケースのように、「近親相姦」が「子孫繁栄」に交換されるという図式は、聖書の中で繰り返し登場すると、リーチは読み解く [リーチ 1980: 20-29]。リーチの論に従えば、聖書の中のキンシップとは、同属であった者を異属の他者に置き換え、それらを再統合させることで成り立っていることになる。つまり、インセストと結婚とは表裏一体であり、それらの置き換えによって、聖書の中のキンシップは構成されていることになる。

創世記の「二人は一体となる」とは、新約聖書の「マタイによる福音書」、19章「離縁について教える」において再び登場する。ローマ・カトリック教会のカテキズム（教義）では、この19章を結婚についての教えを学ぶ上での参照点にしている⁽⁷⁾。

…イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女にお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。したがって、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」… イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通を犯すことになる。」弟子たちは、「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」と言った。イエスは言われた。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」（日本語訳『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1988年より。下線部と強調は著者による。）

この日本語訳では、「結婚できない」「結婚しない」という表現が出てくるが、フランス語に訳された聖書の中には、以下のように「ユーナック (des eunuques)」、つまり、去勢された男性と表記するものがある。フランス語訳の新約聖書が全てユーナックと記されているわけではないが、修道会「仔羊共同体」のリヨン支部で使用されていた聖書は、以下のような訳となっていた。

Il y a, en effet, **des eunuques** qui sont nés ainsi du sein de leur mère, il y a **des eunuques** qui le sont devenus par l'action des hommes, et il y a **des eunuques** qui se sont eux-mêmes rendus tels en vue du Royaume des Cieux. Comprenez qui pourra !

(7) カトリック教会の青年向けカテキズム（教義）『YOUCAT』（日本語、カトリック中央協議会、2014年）を参照。

この結婚にまつわる19章をリヨン支部のシスターと共に参照したのは、筆者が間借りしていた家のご夫婦が離婚することになり、それが気がかりで仕方ないと、シスターに吐露した時のことであつた。そのときシスターは、聖書をもとに結婚と離婚についての考えを筆者に説明してくれたのだつた。ユーナックという表記がすぐ目つき、疑問に思った筆者はその言葉の意味をシスターに尋ねてみた。するとシスターは、「私たちのような人のことだ」と応えて、さらに、「誰も私たちの体には触れない」と付け加えた。「体に触れない」とは、セクシュアルな関係を持たないことの婉曲表現である。それは同時に結婚しないという意味でもあるが、カトリックの修道者の場合は、神と共に在る生き方を選んだと理解すべきだろう。引用文の「天国のために結婚しない者」とは、まさに神と「一体」となることを望む者のことであり、それが、男女一体となる結婚と同じ意味をもつと考える。

神と「一体」になるとは、当然ながらア・セクシュアルな一体化のことだが、それはいかにして可能なのだろうか。一つには、福音を日々音読する実践にあると考えている。神の言である福音を繰り返し唱えること、それが己に届くのだと、週一回の「福音の勉強会」に筆者を誘う際に語ってくれたが、シスターたちは毎日聖書を手にとって、神の言を音読している。以下に引用する一節は、ヨハネによる福音書の冒頭「言が肉となった」であるが、シスターたちは全てを暗誦できるほど読み込んでいる。暗誦できるのは、とりわけ重要なパートとして繰り返し音読していることの証であろう。

初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は、初めに神と共にあつた。万物は言によって成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかつた。言の内に命があつた。命は人間を照らす光であつた。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかつた（日本語訳『聖書 新共同訳一旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1988年）。

この引用が示すように、言は神である。よつて、福音の言を声にして己の肉体に響き渡らせること、あるいは言を息吹にのせて共振する行為を反復すること、それは、神と共に在るためには重要な日々の行いである。福音の勉強会に参加することを通じて、筆者自身も己の肉体に言を響き渡らせることの大切さをシスターから教えられた。

しかし、いまだ経験できずに理解が及ばないこともある。それは、洗礼を受けていない者には許されない聖体拝領である。聖体とは、祭壇上のパンとワインであり、イエス・キリストの肉体と血のことである。祭壇上のパンとワインがキリストの肉体と血に変容することを、専門用語では「実体変化 (transubstantiation)」と呼ぶ。そのように教えてくれたシスターは、「外部の人たちは奇妙に思うかもしれないが、信じる必要がある」と、外部の筆者に対して説明してくれた。祭壇のパンとワインを聖体であると「信じる」とはどのようなことなのだろうか。当然ながら、信

じていないからこそ信じる必要があると、シスターは述べているわけだが、洗礼を受けている人は皆あたりまえのように「信じる」のだろうか。フランス語の動詞「信じる」について解説するプイヨン⁸は、神の存在を「信じる」のではなく、「感受する」のだとして、以下のように説明する。

フランス語の動詞、信じる *croire* [“to believe”]には、違うかもしれないという否定的な意味が潜んでいる。…しかし、神の存在を信じるとするその主張には、疑いは全く含まれていない。なぜならば、神の存在は感受されている *perceived* からだ。とはいえ、神の存在をどのように証明するのかという問いが突きつけられると、再び、信仰における両義性さが浮上する [Pouillon 2016: 485-6]。

つまり、イエス・キリストとの共存関係は信じられるのではなく、感受されているのだという。感受するという経験には、おそらく、聖体拝領が大きな意味を持つと推測する。聖体を拝領するとは、キリストの肉体を食すこと、つまり、キリストのサブスタンスを己に取り入れる行為であり、これはまさにキリストとのア・セクシュアルな一体化である。それは、キリストの現存を確証できない外部の者には当然許されない儀式なのである。

未経験者からの素朴な疑問として、なぜキリストの肉体を食べるのかと、シスターに尋ねてみた。一人のシスターは、「わからない、その意味を一生かけて理解していくのだと思う」と応えてくれた。もう一人のシスターも「わからない」と応えて、さらに、次のような経験談を聞かせてくれた。ある時、ユダヤの人から「あなたはキリストの肉体を食べている。だから、あなたもユダヤ人だ」と言われたことがあったという。イエス・キリストはユダヤ人としてこの世に生を受けており、その肉体を食べている、だから「あなたもユダヤ人だ」と言われたのだと。そのような発想を、シスター自身は驚きをもって受け止めたという。

話を戻すと、性行為を介さないア・セクシュアルな一体化であるが、新約聖書では聖母マリアとヨセフとの関係において重要な意味を持つてくる。以下は、マタイによる福音書 1, 18-24「イエス・キリストの誕生」についてである。

母マリアはヨセフと婚約をしていたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。…24ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった⁽⁸⁾(日本語訳『聖書 新共同訳一旧約

(8) 当日使用した英訳では、次のように表記されていた。...but **knew her** not until she had given birth to a son.

『聖書続編つき』日本聖書協会、1988年より。下線部の強調は著者による)。

このマタイによる福音書では、母マリアと父ヨセフ、そして子のイエス・キリストの三者関係について語られるが、マリアとヨセフは「関係することはなかった」とあるように、二人の間にはセクシュアルな関係はなかったという。つまり、母マリアは生みの親であるが、一方、ヨセフはというと、実のところ父ではなかったのだ。のちにヨセフは、婚約していたマリアと結婚して、イエス・キリストの養父となっているが、マリアとヨセフの間柄について、シスターたちの解釈によれば、二人の関係はア・セクシュアルであり、マリアが出産したのちも二人の関係はア・セクシュアルであり続けたのだという。

「イエス・キリストの誕生」を祝う2022年降誕祭の当日、リヨン支部のチャペルでは24日夜11時から翌朝1時ごろまで儀式が行われた。終了後は食堂に移動してホットチョコレートが振る舞われ、しばらくの間、シスターたちと歓談していた。そこで一人のシスターから「実体変化」という専門用語について教えてもらい、さらに、修道女は神の「妻」とも言われるのだと教えられた。神の「妻」であるとは、マリアとヨセフと同様に、神と共にア・セクシュアルに一体であることを意味するのだろう。その一方で、創世記には「産めよ、ふえよ」と、セクシュアルな関係をもつことの重要性が示されており、人類が「子孫繁栄」に努めてきたことも聖書に記されている。シスターとの個別の勉強会において、イエス・キリストはアブラハムの子、ダビデ王⁽⁹⁾の血筋であることを系図でもって繰り返し教えられたが、人類の系譜継承に関わらないシスターの生き方は神の命に背くことにならないのだろうか。そのような疑問を抱いていたが、ルカによる福音書の20章、「復活についての問答」についての学習によって、一つの答えが見えた気がした。

イエスに尋ねた。「先生、モーセはわたしのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がいないまま死にました。次男、3男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのに相応しいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともしない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである(日本語訳『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』

(9) ダビデ David とは、イスラエル王国第二代目の王(前1000-961年在位)のこと。イエス・キリストの系図がダビデ王から始まる所以について、聖書事典を執筆した山形によれば、救い主はダビデの子孫から生まれるという信仰の影響がみられるという(山形 2015: 177-8)。

日本聖書協会、1988年)。

この章では、夫の死後に未亡人となった女性が夫の兄弟と再婚するレヴィレート婚の事例が登場する。文化人類学では馴染みのあるテーマだが、しかし、レヴィレート婚を通じて何を言わんとしているのか、予習の段階では全く理解することができなかった。福音の勉強会当日も、率直な感想として理解不可能だと述べ、参加者の笑いを誘うことになったが、他方で、わからないと発言したことが一人のシスターの発言を引き出すことになった。それにより、修道者としての生き方に対する、シスター自身の考えの一端を知ることができ、筆者が抱いていた不可解な霧が晴れた気がした。

そのシスターは、レヴィレート婚の事例には一切触れずに、次のようにコメントした。「子孫を儲けることこそが永遠を意味するのだとも読める。しかし、子を儲けることなく、私たちは永遠を手に入れることができる。それが復活である」と。シスターのいう「復活」とは、十字架にはりつけられたイエス・キリストが死後三日目に復活したことを示唆している。さらに、洗礼を受けていない筆者に向けて、次のようにも語ってくれた。「私たちの中にはすでに復活の萌芽が与えられている。だから、私たちは、それ(復活)を目指しているのだ」、と。レヴィレートの慣習は結婚制度のあり方の一例であって、それほど重要な意味を持たないのだろう。むしろ、結婚によって永遠を得るのではなく、イエス・キリストと同じ道を歩み、復活によって永遠を得ることが重要なのだと、シスターは教えてくれたのだった。

IV. おわりに：同一性とインセスト

キリスト教研究について論じる人類学者のフェネラ・キャネル (Fenella Cannell) は、キリスト教が禁欲的なもの、現世放棄的なものとして、限定的に理解される傾向がこれまでの社会学や人類学にはあったと指摘する。それは、セキュラーな学問であるために、宗教と距離をとった結果であったと主張する [Cannell 2005: 341]。アメリカでモルモン教徒として生きる人々とのフィールドワーク経験をもつキャネル自身は、そのような人類学でのキリスト教の取り上げられ方に違和を感じてきたという。アメリカのモルモン教徒によれば、現世での親族ネットワークは天国へと直結しており、死後に復活した者は天国においても子をもうけることができるとされる。それは学術論文の中で描かれるキリスト教とは異なり、肉体に依拠した現実的な考え方だと、キャネルは強調する [Cannell 2005: 342]。

筆者が対話を続けてきたフランスのローマ・カトリック修道会のシスターたちも、世俗的な生き方を捨てた存在だが、しかし、禁欲的に己の肉体を律するようなことはない。肉体を保つためには食べることは重要である。食べ物を乞うためにシスターたちは民家を回り、そこで出会う人々との対話を己のミッションとして課している。ミッションを通じて得られた食について語る

シスターたちの姿からは、肉体を媒介として神と共に在る有り難みを実感しているように筆者には見受けられた。振り返ってみると、初めて対談した時から、そのような認識をシスターたちは筆者に伝えようとしてくれていたと今では理解している。

シスターたちと初めて対談したのは、2022年9月29日夕刻のこと、「仔羊共同体」リヨン支部を訪れたときだった。キリスト教について一から学びたいという筆者の要望を受けて、シスターの一人は次のように語ってくれた。「私たちにとって神とは実在する人物であり、仏教とは違う」のだと言い、そして、自分の手首を片方の手で掴んでみせた。そのしぐさから、神が現存していること、そして、その現存を己の肉体でもって感受できるのだと、筆者に伝えようとしていたのだろう。

修道女とは神の「妻」でもあるとシスターから教わったが、「妻」としての関係とは、肉体を介したセクシュアルな男女の結婚とは異なり、ア・セクシュアルなものである。結婚してもア・セクシュアルであり続けた、マリアとヨセフのケースもあるように、一体化のあり様にはセクシュアルとア・セクシュアルの二通り存在する。ただし、どちらの一体化もインセストと表裏一体であることは、聖書の精読とシスターとの対話から明らかである。まず、男女一体の原型とされるアダムとエバであるが、アダムの体からエバは生まれているため、二人の一体化は親子にも等しいという意味でインセストに相当する。その関係がのちに、「子孫繁栄」を目的とした結婚に置き換えられたと、リーチは主張する。次に、修道女と神とのア・セクシュアルな関係であるが、修道女は神に対して「父」と呼びかけながらも、己を神の「妻」だとも言う。この後者の関係について、リーチが主張したように、「近親相姦」がどこかの時点で「子孫繁栄」と置き換えられるのだろうか。

インセストの禁忌と婚姻について再考する出口は、「近親相姦」と「子孫繁栄」とを二項対立的に捉えることなく、婚姻システムが孕んでいるパラドックスな側面を指摘する。レヴィ＝ストロースによるインセスト・タブーの議論をもとに考察すると、婚姻とは、「インセストを禁止しながらもそれ自体別の水準ではインセストでしかない」ものであり、「禁止した当のものを再び召還する」システムであると、出口は主張する（出口 2001: 106）。出口が指摘するように、婚姻の関係を結ぶためには、何らかの共通ルールを有する同族が必要となる。その中で誰を近親者とし、誰を近親者としないかを定める制度、つまり、差異を生み出す制度が婚姻なのだという。よって、「近親相姦」（インセスト）と「子孫繁栄」（婚姻）とは交換できるものではなく、むしろ不可分なものなのだ。

インセストとして言及していないものの、出口と同じように、婚姻関係が含み持つ同一性に着目するイレヌ・テリーは、創世記におけるアダムとエバの関係を事例に取りあげ、次のように論じている。最初の人間のあばら骨の一つから、もう一人の人間がつけられ、のちにアダムとエバと名付けられた。それは、アダムがエバに先立ち、アダムがエバを包摂した序列の関係と解釈されるが、それは同時に、二人が同一であることも示唆している [テリー 2019: 63]。換言すると、

アダムがエバを包摂できるのは、エバはアダムの分身だからであり、両者の一体化とは同一者の間で成り立っていることになる。

さらにテリーは、婚姻が孕む同一性がまさに、フランス同性婚の道を開いたのだと主張する。フランスにおける民事婚の始まりは、アダムとエバの関係のように、一方が片方を包摂する序列を要請するものであったが、のちに二者間の離婚が認められることで夫婦の序列は解消され、二重奏（デュオ）時代へと移行する。その次に生じた変化とは、対等な男女に加えて、対等な同性をも組み入れた「性の区分の再編」であったと、テリーは強調する。その再編を「性の無差別化」と混同してはならないとテリーは力説するが（テリー 2019: 22）、それは、同性婚に反対した人々に対するメッセージである。

反対派は「性の無差別化」によって「人類学的断絶」が生じると恐怖を煽っていたのだが、しかし実際には、アダムとエバという性差が定まる以前、つまり創世記に登場する両性具有へと人類が戻ることはなかった。同性婚をめぐる議論によって国家が二分されたという現象自体が、「人類学的断絶」に値する現象だったと言えるのではないだろうか。

本研究は JSPS 科研費 JP19K21669/JP23K01038 の助成を受けたものです。

引用文献

- Balzani Marzia & Niko Besnier 2022. Social and cultural anthropology for the 21st century: connected worlds, London; New York, New York: Routledge.
- Bulter, Judith. 2002. Is Kinship Always Already Heterosexual? *Differences: A Journal of Feminist Cultural Studies*. 13(1): 14-44.
- Cannell, Fenella. 2005. The Christianity of Anthropology. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*. Vol. 11, No.2. pp.335-356.
- 出口顯 2001 「インセストとしての婚姻」川田順造編『近親性交とそのタブー—文化人類学と自然人類学のあらたな地平—』藤原書店.
- Gaillard, Gérald. 2022. Françoise Héritier, Anthropology's Ancestors, 3, Berghahn Books.
- 長谷川秀樹 2015 「同性愛者は『性的マイノリティ』か？パックスから同性婚に至るまでのフランス社会における同性愛と同性親権をめぐる議論」横浜国立大学教育人間科学部器用 III（社会科学）No.17
- 服部有希 2013 「フランスの同性婚法—家族制度の変容—」『外国の立法』258, pp.22-48.
- Michaud, Mathilde. 2020. Translating the Bible into English - How translations transformed gendered meanings and relations. In Luise von Flotow and Hala Kamal, eds. *The Routledge Handbook of Translation, Feminism and Gender*. London: Routledge.
- Pouillon, Jean. 2016. Remarks on the verb “to believe,” Translated from the French by John Leavitt. *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 6(3): 485-492.
- Robcis, C. 2015. Catholics, the “Theory of Gender,” and the Turn to the Human in France: A New Dreyfus Affair?. *The Journal of Modern History* 87(4): 892-923.
- テリー, I. 2019 (2016) 『フランスの同性婚と親子関係—ジェンダー平等と結婚・家族の変容』石田久仁子/井上たか子訳 明石書店.
- 山形孝夫 2015 『読む聖書事典』ちくま学芸文庫.